

新太倉地区（北京内城）の街区構成に関する考察

日大生産工(院) ○成 浩源 滋賀県大環境科学 川井 操
 日大生産工 布野 修司 日大生産工 広田 直行

1 はじめに

1-1 研究の背景と目的

本稿では、北京内城「新太倉地区」を対象とし、その街区構成を明らかにする。

北京旧城には、伝統的住宅である四合院や胡同と呼ばれる路地空間も数多く残され、歴史文化保護区として現在 33 箇所の地区が指定されている。その中で、本稿の対象とする新太倉地区も歴史文化保護区に指定されている。

1-2 既往の研究

北京の都市組織研究として第一に挙げられるのは陣内・朱（1998）¹⁾である。『乾隆京城全図』（1750）をベースに近代の都市図、文献資料を用いながら、現地調査によって、住宅と店舗、居住地と商業地、市場や宗教施設などの都市施設、盛り場の分布について分析し、北京の歴史的、社会的な空間構造を明らかにしている。

続いて、鄧・布野の一連の研究は北京の朝陽門地区の街区構成とその変化を明らかにした上で、同様に『乾隆京城全図』を元に、住民（軍）組織、街区構成、宅地分割、居住単位などを明らかにしている。布野（2015）²⁾は、大元都市すなわち大都・北京を対象として、中国の古都、西安、洛陽、開封、杭州、南京について臨地調査と膨大な文献を基に空間構成とその変容を明らかにした上で、北京の空間構造を包括的に明らかにしている。

さらに、布野（2015）は、中国都城のモデルとして、寸法体系、王都の象徴性などを検討しながら、『周礼』都城モデル、長安都城モデル、大都都城モデルの3つを明らかにしているが、それをまとめたのが日本学士院紀要に発表された Shuji Funo（2016）³⁾である。

中華人民共和国成立後の北京の都市計画と再開発については、王による一連の論考^{4) 5)}がある。本稿の対象地となる新太倉地区については、尼（2007）⁶⁾の論文があるが、四合院の類型化のみを行っている。

1-3 調査の概要

本稿は、2次に渡る継続的な臨地調査を元に行っている^{注1)}。調査項目は、社区居民委員会、施設分布（行政施設、地域施設）、街路空間（駐車スペース、廃品回収場・ゴミ箱、侵街（道路の不法占拠）、宅地分割、電気メーター数である。また、8軒（35住戸）の雑院化した四合院住宅の実測を行った。さらに、居住者へのヒアリング（家族構成・出身地・前住所・年齢・職業・収入・定住/移住希望・家賃）を行った。

ベースマップとなるのは、『乾隆京城全図』（1750）である^{注2)}。この地図には、全ての建物が院子を中心に、立面図を四方に倒す「起こし絵」の図法で描かれている。また、入口の門が選別でき、二重線が引かれている壁によって境界が明確に仕切られ、建物の規模や四合院の類型が判別できる。宮殿、重要な衛署、王府などの府第は太線で描かれ、他の建物と区別されている。

2 新太倉地区の概要

新太倉地区は、北京内城の北東部に位置する。北は東直門内大街、南は東四十条、東は東直門南小街、西は東四北大街に囲まれるほぼ正方形の街区である。街区規模は、東西 710m、南北 786m、面積は 55.8ha、人口は 21,774 人（2019 年）である。北西の角には北新橋地下鉄駅、南西の角には張自忠路地下鉄駅がある。南北西に面する街区も同じく歴史文化保護区選定地域であり、北京旧城内でも、古い北京を色濃く残している地域の一角にあり、平屋の四合院が数多く現存する。

新太倉地区の中央北部には、明代には東側の東直門から運ばれる物資のための新太倉が置かれていた（Fig. 1）。現在、同地区には、清末民初の政治家・梁啓超^{注3)}の故居（民国期）や質屋旧址（民国期）といった2件の東城区文物保護単位が現存し、20件以上の保護院落がある。

CONSIDERATIONS ON BLOCK FORMATION OF XINTAICANG DISTRICT
 (INNER CASTLE OF BEIJING)

Kogen SEI, Misao KAWAI, Shuji FUNO and Naoyuki HIROTA

新太倉地区は、「小菊社区」「九道湾社区」「十三条社区」「十二条社区」「門楼社区」の5つの社区^{注4)}に区分されており、各社区内にはそれぞれの社区居民委員会^{注5)}が確認できる(Fig. 1)。

- A. 小菊社区 (人口4,819人、世帯数1,821戸)
- B. 九道湾社区 (人口3,986人、世帯数1,503戸)
- C. 十三条社区 (人口4,980人、世帯数1,021戸)
- D. 十二条社区 (人口3,428人、世帯数1,295戸)
- E. 門楼社区 (人口4,561人、世帯数1,833戸)

3 街区構成

3-1 街路体系

新太倉地区の街区構成をみると、南側一帯は、布野・鄧 (1999) の提示している北京内城の基本街区モデルに則っている。

新太倉地区には、街路名称を持つものは計28である。街路体系を街路名称によって分類すると、語尾に「条 tiao」の付くのが5、「街 jie」が4、「胡同 hu-tong」が11、「巷 xiang」が8である。

街路のヒエラルキーは、大きく以下の3つに分類できる (Fig. 2)。

I. 街区を囲む主要街路および街区内部に縦横に走る主要街路「大街」「小街」。

II. 主要街路から分岐し主要街路同士を結ぶ2次的な街路「条」「胡同」。

III. 路地という意味のある、街区の内部へと分岐する街路「巷」。

地区内で75地点を選定し、道幅を測定した。Table. 1 より、「街」の街路幅の平均は18.0m(最大:28.1m、最小:3.1m)、「条」の街路幅の平均

は12.7m (最大:38.0m、最小:4.6m)、「胡同」の街路幅の平均は4.0m (最大:4.9m、最小:3.1m)、「巷」の街路幅の平均は3.6m (最大:5.2m、最小2.5m) である。

街路幅において、それぞれの街路の特性は「街」>「条」>「胡同」>「巷」のヒエラルキーに従って街区を細分化しているが、東四十条は、「街」>「条」>「胡同」>巷のヒエラルキーに厳密に準じているとはいえない。なぜなら、東四十条が、1950年代に道路幅が拡張され、「街」と同じように主要街路として整備されたからである。東四十条は、最も道幅が広く、38.0mである。街路幅が最も狭い街路は、北側にある九道湾東巷である (2.4m)。

街路形態について、南側を占める「条」は直線の街路であるのに対し、北側に多くみられる「胡同」や「巷」は複雑に曲がっている。

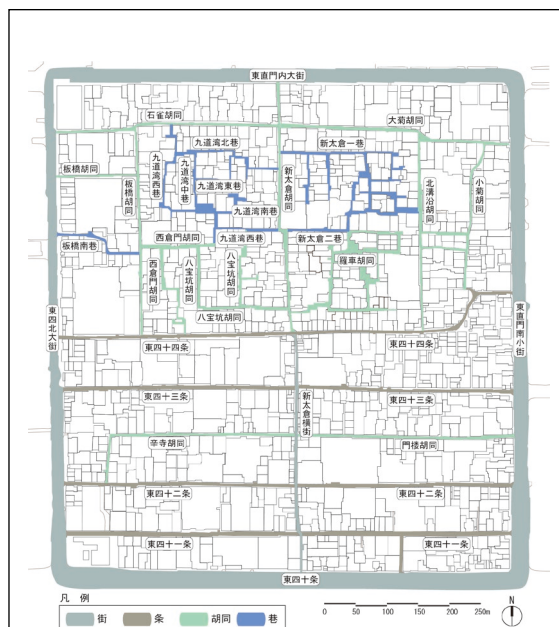


Fig. 2 街路体系

街路種類	街路名	街路幅 (m)	街路ごと平均幅 (m)
街	東直門内大街	22.7	18.0
	東直門外大街	18.2	
	東直門南小街	28.1	
	新太倉横街	3.1	
条	東四十条	38.0	12.7
	東四十一条	7.3	
	東四十二条	4.6	
	東四十三条	6.9	
	東四十四条	6.7	
胡同	辛寺胡同	4.3	4.0
	門樓胡同	4.9	
	板橋胡同	3.8	
	石家胡同	4.5	
	西直門胡同	3.5	
	八宝坑胡同	3.2	
	新太倉胡同	4.5	
	大菊胡同	4.7	
	小菊胡同	3.8	
	北溝沿胡同	3.1	
	羅家胡同	3.9	
巷	九道湾中巷	3.2	3.6
	九道湾北巷	2.5	
	九道湾東巷	2.4	
	九道湾西巷	3.5	
	九道湾南巷	4.2	
	新太倉一巷	3.6	
	新太倉二巷	5.2	
	板橋南巷	4.2	

Table. 1 街路幅

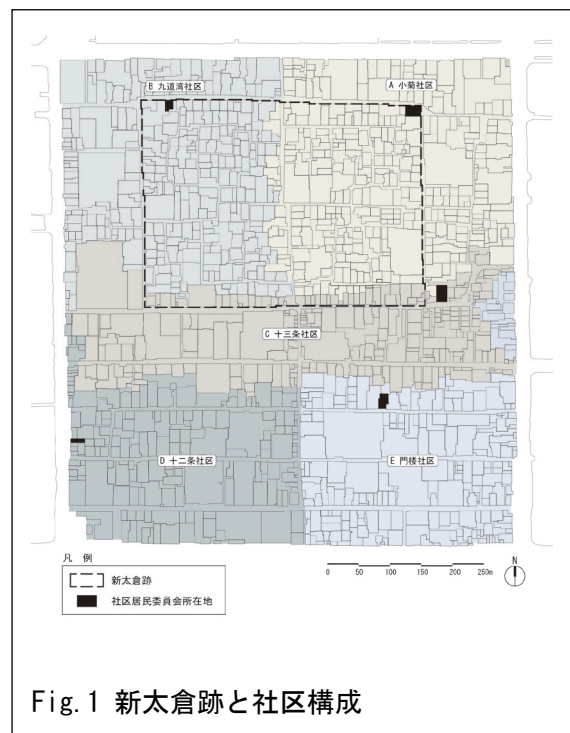


Fig. 1 新太倉跡と社区構成

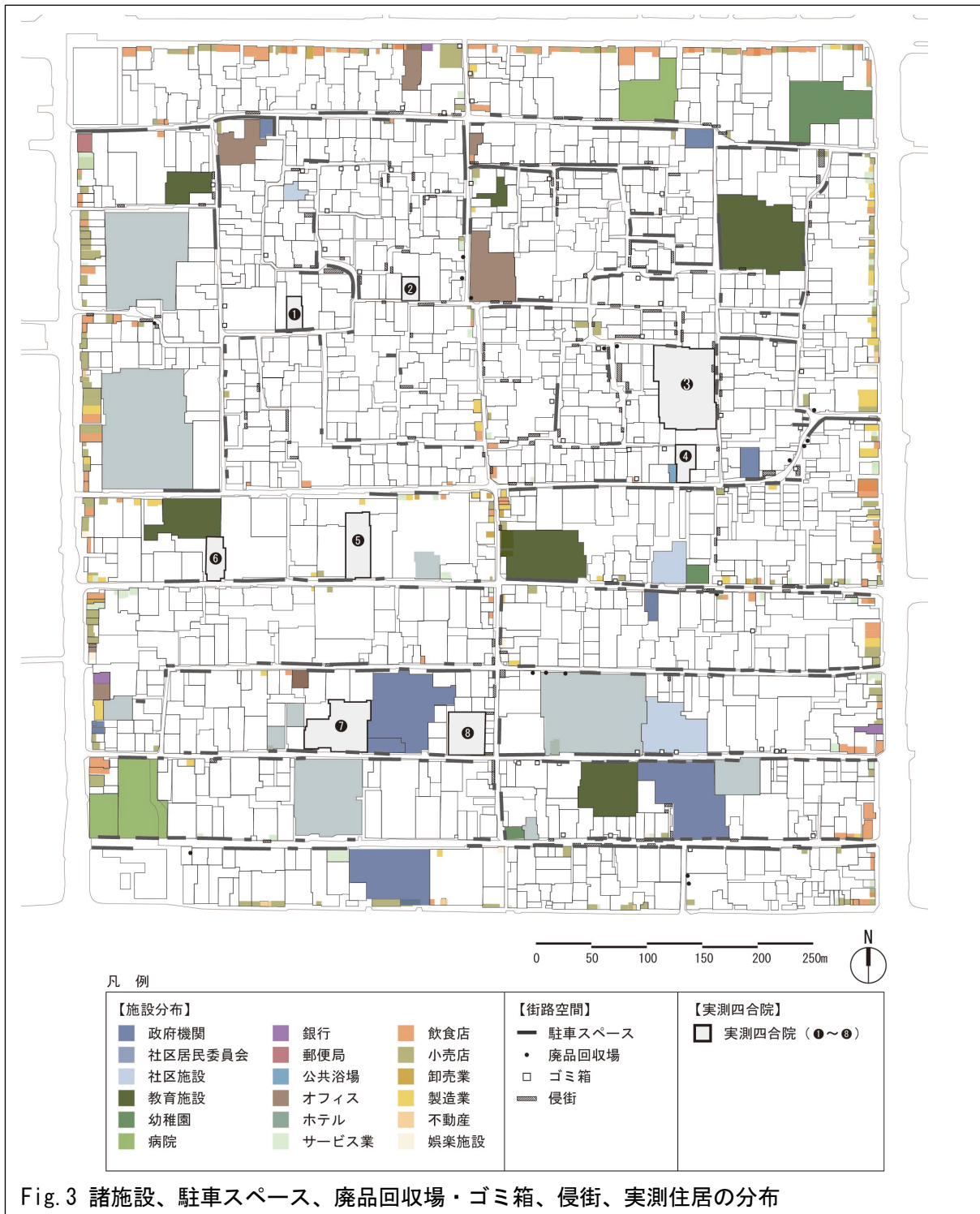
3-2 施設分布

新太倉地区に立地する諸施設は、地区内の建物のほとんどを占める住宅を除くと次の施設が確認できる (Fig. 3)。

行政施設として、社区居民委員会 (5)、国家安全局 (2)、房屋土地経営管理所 (1) がある。教育施設は、小学校 (5)、専門学校 (5)、幼稚園 (4) がある。宗教施設として清真寺 (1)、医療施設として病院 (2) がある。公共サービス施設として、老人ホーム (2)、銀行 (3)、郵

便局 (1)、ホテル (7)、美術館 (1) がある。

地域施設は、種別は多様であるが、そのほとんどが地区の居住者の生活を支える施設である。利用者側の生活行為の観点から、次の9タイプに分類することができる。①公衆トイレ、②公衆浴室、③飲食店、④物品・食料品販売施設、⑤自転車・バイク修理施設、⑥サービス施設 (不動産、婚姻相談所、携帯ショップ、カメラスタジオ、印刷)、⑦娯楽施設 (麻雀、宝くじ)、⑧製造施設 (家屋塗装・修理、リフォーム



ム)、⑨理容・美容施設。

以上のような、地域施設は四合院の街路側の棟を改装して店舗にしているものが多い。また、民間会社(9)(出版会社、交通会社、建設会社)も確認できる。

街路ごとにみると、新太倉地区の外側に当たる街路(東直門内大街、東四北大街、東直門南小街、東四十条)と、地区の中心を南北に貫く街路(新太倉胡同、新太倉横街)、東四十三条に施設が集中している。外側の街路には飲食店、小売店が多いのに対し、地区の中心を貫く街路には比較的卸売店が多くみられる。

また、地区の北東に当たる東直門南小街の北側には、所得の低い製造業が集中している。新太倉胡同を除く北側の街路沿いには、施設が少なく住宅が多い。小売店の種類が多く、住民は歩いて行ける範囲で生活用品や食品が揃う。

3-3 街路空間

新太倉地区の街路空間では、いくつかの特徴的な機能を持つものがある。街路空間において、①駐車スペース、②ゴミ箱・廃品回収場、③侵街(道路にはみ出した物置場)が確認できる。

①駐車スペース(213):調査対象地には、駐車専用のスペースというものがなく、個人で自邸を改装して駐車スペースを確保するか、路上に一系列駐車をする光景がみられる。

駐車スペースは同地区の全体を覆い尽くしているが、特に著しく多いのは、東四十一条(33)、東四十二条(32)、東四十三条(24)である。「条」の街路空間に多い理由として、東西を直線的に走り車が進入しやすいこと、街路幅が広いこと、住民の自家用車の所有率が高いことが挙げられる。また、九道湾西巷、新太倉一巷、羅車胡同のような街路角の多い街路にも多くみられる。

②廃品回収場(17)・ゴミ箱(72):臨地調査中、オレンジ色のユニフォームを着た住人が廃品回収場で毎日大量の大型のゴミを分別し、車やリアカーで運んでいる姿がみられる。また、ゴミ箱について、特に多い街路は、東四十一条(9)である。ゴミ箱は、四合院の入り口に設置されており、地域住人は生ゴミをこまめに捨てにくる。その多くは、街路の曲がり角に集中する。これは、集積するための街路幅が確保されているためである。廃品回収場・ゴミ箱とともに、北側と南側でほぼ同数である。

③侵街(158):侵街とは、公共の街路に私有の生活物が溢れる現象である。住居スペースが狭いことから、侵街がみられる。個人の屋外スペースとしてガーデニングを楽しんでいる住戸、物置を街路に設置している住戸をみられる。特に著しく集中するのは、街路の入り組んだ羅

車胡同(17)や新太倉一巷(25)といった中央北東側一帯である。

4 まとめ

新太倉地区は、2012年に三回目の歴史文化保護区に選定され、南北西に面する街区も同じく歴史文化保護区選定地域であり、北京旧城エリア内でも、古い北京を色濃く残している地域の一角にある。街区内の街路のヒエラルキーは、大きいものから、「街」>「条」「胡同」>「巷」に段階づけられ、それぞれの街路の特性はヒエラルキーに従って街区を細分化している。その内、「条」「胡同」「巷」には、生活空間が溢れ出し密集していること、商店の種類の違いから地区の外側と内部で性質が異なるといえる。また、南側にオフィスが多く、北東に所得の低い製造業の商店が多くみられることから、地区内で南北の経済格差があると考えられる

主要参考文献

- 1) 陣内秀信、朱自煊: 北京—都市空間を読む、鹿島出版会、1998
- 2) 布野修司: 大元都市、京都大学学術出版会、2015
- 3) Funo Shuji: Ancient Chinese Capital Models - Measurement System in Urban Planning -, Proceedings of the Japan Academy Series B Physical and Biological Sciences, Vol. 93, No. 9, pp. 721-745, 2017. 11 (in English)
- 4) 王軍: 城記、三聯書店、2003
- 5) 王軍: 拾年、三聯書店、2012
- 6) 尼羅紅: 北京胡同四合院類型研究、中国建築工業出版社、2009

注

- 注1) 第一次調査は2014年8月25日～30日、川井操、呉宝音、布野修司によって行った。第二次調査は2015年8月11日～20日、成浩源、西出彩、川井操、布野修司によって行った。
- 注2) 清の第6代皇帝乾隆帝(1711～1799)の命で、宮廷画家G・カスティリオーネによって1750年頃作製されたものである。
- 注3) 梁啓超(1873～1929年)、清末民初の政治家、ジャーナリスト、歴史学者。中国の古代建築と文化遺産の保護に尽力した建築家・梁思成の父。
- 注4) 社区とは、都市社会福祉サービスを提供する主体となり、住民生活の質の向上を目指す地域コミュニティである。
- 注5) 社区居民委員会は社区建設の中心的な担い手となる住民組織である。